

サビエル生誕五百年



巡礼の道

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

155

二十五万人の死

「昭和二十年九月、北部ルソン山岳州キアンガンで投降した私たちは米軍に護送されて南下する途中、かつて

の激戦地、バレテ峠にさしかかった時、思わず驚きの声をあげた。八カ月前にここを通った時に見た大森林は

今や一木一草に至るまで焼き尽くされ、砲弾がえぐっていた。聞きしにまさるこの破壊の凄絶さに私は目を見張るばかりであった。……死者たちは何も語ることはできない。彼らは、自分たちが一日、敵を遅滞させれば、それだけ内地の戦備の時に稼がれ、ひいては肉親、同胞の安全がよりよく保証され

現地の人たちが建てた小川さんの墓



い。彼らは、自分たちが一日、敵を遅滞させれば、それだけ内地の戦備の時に稼がれ、ひいては肉親、同胞の安全がよりよく保証され

るという望みに戦いの意義を見出し、信じられないほどの悪条件下で戦った。

これを彼らに代わって内地の人々、後世の人々に伝えることが、私たちが生き残った者の責務ではあるまいか。

……八カ月の長きにわたる苦闘で二十五万という死者を出したルソン戦が、地味な持久戦のゆえに無視されて良いはずがない。ここに死者に代わって語るものである」

これは小川哲郎著「北部ルソン戦・後編」のあとがきの一部である。

フィリピン・ルソン島北部の山岳民族奨学生を訪ねる旅に参加を決めると、担当の恩地誠神父(現・萩カトリック教会)から「出発までに読まれたら」と二冊の本を渡された。冒頭のあとがきがあるのが戦争と人間の記録「北部ルソン戦」前編と後編である。著者の小川さんは昭和十八年、軍人として

ではなく教育要員としてフィリピンに派遣され、九死に一生を得て終戦後帰国。昭和四十六年、高校の校長を退任したあと厚生省のフィリピン遺骨収集団員としても何度もフィリピンに行かれた。

日本人の遺骨収集だけでなく、現地の人たちとの友好関係回復のためにも努力された。その結果、現地の人から信頼され、小川さんが亡くなられると、分骨して現地に墓が建てられたほどである。

小川さんの書かれた二冊の本を読んで、戦争のことを全く忘れていた自分を恥じた。

というよりも、戦争末期、フィリピン・ルソン島で二十五万人もの人が亡くなり、それも戦闘ではなく餓死や病死した人が多かったということを全く知らなかったことに對して。そして今回のマニラからベンケット道路を通ってバギオへ、さらへという旅のコースが

恩地神父から渡された二冊の本



日本軍敗走のコースと同じであることを知って気持ちが重くなった。

と、昨年一年間にフィリピンから持ち帰られた遺骨の数は千二百三十柱。

旅の途中の三月二十六日朝、バギオのホテルでNHKの海外放送を見ていたら、登山家の野口健さんらのNPOがフィリピンから四百十の遺骨を持ち帰ったというニュースが流れた。帰国後調べてみる

と、昨年一年間にフィリピンから持ち帰られた遺骨の数は千二百三十柱。終戦から六十四年も過ぎていたのに、その数の多さに驚くとともに、まだ百十五万人の遺骨がフィリピンをはじめ異国の地に眠っていることを知り、がく然としたのである。(元山口放送取締役ラジオ局長)